



TITLE:

総合社會學概念

AUTHOR(S):

米田, 庄太郎

CITATION:

米田, 庄太郎. 総合社會學概念. 經濟論叢 1929, 28(3): 371-388

ISSUE DATE:

1929-03-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/129725>

RIGHT:

京都市帝國大學經濟學會 經濟論叢

第 三 號 第 二 十 八 卷

昭和四年三月一日發行

論 叢

電 氣 稅 論

法學博士

神戶 正雄

總合社會學概念

文學博士

米田庄太郎

財產生命保險

經濟學博士

小島昌太郎

說 苑

最近の諸國幣制改革の傾向

經濟學士

島 本 融

美濃國騷擾史

經濟學士

黑 正 巖

大阪爲替會社の業務

經濟學士

菅野和太郎

雜 錄

ワグマン教授の『景氣變動論』

經濟學士

谷口 吉彦

通貨主義とリカードの貨幣論

經濟學士

有 井 活

地方費に對する國庫補助

經濟學士

安田 元七

東京市財政十年計畫

經濟學博士

沙見 三郎

總合社會學概念

米田庄太郎

- (1) 總合社會學概念を新たに規定する必要、(2) トレールチの總合社會學排斥論(以上前號掲載)、(3) 總合社會學と形而上學
(4) 總合社會學の純科學的概念、(5) 純科學的總合社會學の可能性、

(3) 總合社會學と形而上學

今コントやスペンサーの社會學は云ふまでもなく、今日まで同一方針に於て大體上總合社會學として社會學を建設せんとせる多數の社會學者の體系に就て詳しく吟味するに、何れも公式的には社會學は科學であると宣言して居るに拘らず、其の內實に於ては一種の形而上學であるか、或は形而上學的原理を先づ獨斷的に定立し、そうして社會科學的知識を運用して巧みに之を展開して居るものであることが、洞察されるのである。かくて歴史的には純科學的な總合社會學は嘗て實際上建設されたことはないと言はねばならぬ。そうして此の點に就て、メンツェルの見解は注意す可きものであると思ふ。

メンツェルは其の著「自然法と社會學」(Ad. Menzel, *Naturrecht und Soziologie*, 1912.) に於て、先づ近世の始めより社會科學が、自然法論の名の下で唱へられたる一定の形而上學的思想によりて、如何に根本的に支配されて居たかを歴史的に約説し、次に其の後進化法則の名の下で唱へられて居るヤハリ一定の形而上學的思想が、自然法論に代つて如何に今日まで一切の社會科學を根本的に支配して居るかを約説し、更に現代の多數の社會學に就て、同様に一定の形而上學的思想が彼等の思惟を根本的に支配して居ることを指摘したる後、結論に於てゾウルケム一派の社會學者が、自然科學の歴史的發達から類推して、社會學も自然科學に於て到達されたと同じ客觀性に、早晩到達するであらうと希望して居ることを評して、「私はゾウルケムの此の希望に全く同意することは出来ない、寧ろ一切の社會科學に必然的に附着する此の主觀的要素に於て、社會科學と自然科學との根本的差別が存立するのである」と述べ、そうして其の理由を左の如くに論じて居る。

社會科學は種々なる度合に於て人間の影響を受ける事物を、其の科學的研究の對象として居る。自然科學にありては目的思想の使用は自から形而上學的性質を帯びるが、社會科學或は文化科學の範域にありては、此の範疇の使用は正當である。此處では目的思想の適用は異質的要素の移入を意味しない。吾人は實に吾人自身の意識に於て、人間の文化生活に於ける諸動機の効果に對して、直接の了解を有する。但しそれが爲めに因果聯結の研究は停止されると云ふのではない、只、一切の文化科學に對しては、原因の範疇と相並んで目的論的要素が、方向を與へるものとして現はれると云ふだけである。

尚ほ文化科學の右の特色に、更に文化事物の批判の可能性及び價值概念の形成が結び附いて居る。宇宙學的或は生物學的現象の批判的評定は科學的には不可能であるが、併し文化現象はかゝる評價を受けるものである。更に社會科學は自然科學に反し

て、其の研究の對象を自から變更し得る眞實なる力であると云ふ點に於て、兩者の間に重大なる差別が認められるのである。自然科學的學説は正しきにせよ、誤つて居るにせよ、それが關係する事物に於て、何等の變化をも生ずることは全く出来ない。彗星の本質は、科學的天文學に於て如何なる見解が支配して居るとも、夫れから全く獨立して居る。植物に於ける新陳代謝の本質は、植物哲學の學説によりて毫も變更されない。

併し文化科學或は社會科學にありては事態は全然異なつて居る。國家の本質や國權と臣民との基本關係に關する一定の理論が承認される場合には、國家即ち研究の對象もそれに應じて變化すると云ふ結果が生ずる。國民經濟學の範域に於ては、此等の現象は容易に見出される。例へば自由貿易派の學説が、如何に實際上改變的な作用をなしたかは、敢て詳しく説明するを要しない。同様な事は一切の文化科學に於て證示されることが出来る。……然るに自然研究の範域にありては、之れに類する事は全く見出されない。何れの化學的學説も、化學的現象の性質及び形態に於て何等の變化をも生ずることは出来ない。

かくてメンツエルは最後に左の如く論結して居る。

吾人は其等の見地を眼前に置くならば、社會學的諸體系に關してさきに加へられた批評は、決して非難として考へられることは出来ない。其處に證示されたる主觀的混合物は、社會科學的思維の必然的附屬現象として自から生ずるものである。吾人は又理想の設定、倫理的及び政治的要術の主張は、事情によりては、現實的生活の正しき記述よりも、一層大なる價值を有するものであると云ふ見解さへも、唱へることが出来るのである……。

メンツエルは以上述べしが如くに、主觀的見解、世界觀的思想、形而上學的思想が社會科學に混入し、支配的勢力を振ふのは、決して偶然な或は恣意的な事柄ではなく、社會科學の本質的一要件であつて、夫れが自然科學から根本的に區別される一特徴であるまで考へたのである。そうしてメンツエルの如く、科學と云へば夫れは方法論上自然科學と稱せられるもの、即ち普遍的因果必然關係を究明せんとするものに外ならぬと見るに於ては、彼の云ふ處は全然正當であること認めねばならぬ。尙ほトレルチの如く西南獨逸派の説に従ひ、自然科學の外に歴史科學なるものを方法論上認めるとしても、科學とはヤハリ本來因果關係を究明するもの、即ち私が理解科學

と稱するものにして、夫れ以外に科學は存立しないと考へるに於ては、メンツェルの説はヤハリ妥當するのである。是れ歴史科學なるものは、個性的或は個體的なるものを價值に結び附けて (Wertbeziehung) 選擇し、個性的因果關係を究明せんとするものであると考へられる限り、自然科學の外に歴史科學を方法論上設定するとしても、尙ほ社會現象或は文化現象の科學的認識は完成されることは出来ないから、形而上學的な目的論的見地が、自から社會科學に混入せざるを得ないからである。

尙ほ最近獨逸に於ては、新たに勃興し來れる哲學的傾向に従ふて、形式社會學を以て満足せず、之を棄て、或は之れより進んで、質料的或は實質的社會學即ち私の總合社會學と稱するものと大體上一致するものを、建設せんとする傾向が著しく現はれて來たが、今此の傾向を代表すると思はれる主要なる人々の説を吟味すると、夫れはヤハリ一般に社會學を哲學的なるもの或は形而上學的なるものとして建設せんとするものであることが覺られる。例へばマックス・シェラーが文化社會學と稱して新たに建設せんとする總合社會學は、形而上學的なものにして、彼は夫れはつまり人間の「精神論 (eine Geisteslehre des Menschen)」を必然的前定となすものであると云ふて居る。

(Max Scheler, *Versuche einer Soziologie des Wissens*, 1924.) 又アルフレート・ウェバーがヤハリ文化社會學或は歴史社會學と稱して新たに建設せんとする社會學、即ち「生活諸聯結、一の全體

に於ける總括及び其の普遍的結果を把握せんとする」社會學も、ヤハリ形而上學的なものにして、彼は明かに夫れは「以前の歴史哲學の問題呈出を受け入れ、之を只稍々異なる、より多く經驗的な、より多く實證主義的な方法から借り來れる諸手段を以て解決せんとする」ものであると述べて居る。(Alfred Weber, Ideen zur Staats und Kultursociologie, 1927.)更に傳來の社會學即ち總合社會學は學問論上到底一の科學として建設し得られるものでなく、そうして夫れは當然文化哲學の終結的學科としての歴史哲學として、始めて正當に建設し得られるものであると見る人々もある。(Georg Mehlis, Lehrbuch der Geschichtsphilosophie, 1915.)されば總合社會學は歴史上本質的には常に形而上學的なものとして建設され、又今日に於てもヤハリ本質的には形而上學的なものとして建設されて居るので、嘗て眞に一の科學として或は純科學的なものとして建設されたことがなければ、今日もヤハリ同様である。然らば純科學的なものとしての總合社會學は、如何にして可能であるか。就ては先づ總合社會學の純科學的概念を規定することが肝要である。

(4) 總合社會學の純科學的概念

社會學史上從來解されて居た意味、及び今日も尙ほ一般に解されて居る意味に於ては、總合社

會學は到底哲學を離れ、哲學から純化されたる一の科學として、或は嚴密に云へば一の科學の一部門として、構成され得ないことは明白である。されば一の科學として、或は一の科學の一部門として總合社會學を構成せんとするに於ては、吾人は先づ其の純科學的概念を規定せねばならぬ。そうしてそれが爲めには先づ傳來の總合社會學の概念から、夫れは人類全體の歴史的發達の終極目標或は理想目標を設定或は究明せんとするものであると云ふが如き任務を、全く排除せねばならぬ。是れかゝる目標は決して科學的に設定或は究明し得られるものでなく、只形而上學的にのみ設定又は究明されるものであるからである。次に人類の本質として何等の超經驗的なものをも前定してはならない。例へばコントの主張せる人類固有の進歩性と云ふが如きものや、又マックス・シェラーの「人間の精神論」と云ふが如きものを前定してはならない。是れかゝる超經驗的なものは、只形而上學的にのみ設定し得られるものにして、科學的には決定し得られないものであるからである。次に人類の全體發達概念を、從來の總合社會學に於て一般に解されて居る如く、人類の全體進歩の意味に解してはならない。是れ人類の全體進歩なるものは、一定の全體的終極目標或は理想目標を前定しなければ考へ得られないものであるからである。總合社會學の純科學的概念に於ては、人類の全體發達とはつまり人類の秩序ある變化或は變遷を意味するだけのものであつて、夫れが進歩であるか又は退歩であるかは、社會哲學或は社會形而上學によ

りて始めて決定さる可きである。(但し人間の活動或は行動の中で進歩を云々し得るものがある。夫れは科學及び技術である。是れ科學は經驗的事實を廣く詳しく深く認識せんとする明確に決定されたる經驗的目標を有し、其の經驗的目標によりて現實なる作業が一々評定され得るからであり、技術も亦明確に決定されたる實際的目的を有し、其の目標によりて現實なる作業が一々評定され得るからである。)尚ほ注意す可きは、科學としての社會學の一部門としての總合社會學は、さきに述べし科學の一般的性質に従ひ、絶對的知識を求めらる可きものでなく、相對的知識を以て満足し、そうして出來るだけ其の相對性を減少することを目標となす可きものである。

今右に述べし諸點に注目して總合社會學の概念を科學的に純化し、其の純科學的概念を一般的に規定すれば、要するに總合社會學は純正社會學を基礎とし、之れに基いて一切の特殊社會科學の結果を總合して、以て社會現象全體の知識を整理しつゝ、又各特殊社會科學の上に反動し或は作用して、其の研究を促進し、特殊社會科學と相互的影響の下に、相携へて社會現象の科學的認識を大成す可きものである。

此處に總合社會學の純科學的概念を詳しく論述する餘白はないから、只右の如くに一般的に叙述するに止めるが、併し其の意味を明示する爲めに、尚ほ少しく論じなければならぬ問題がある。それは總合社會學によりて、其の研究の結果が總合されると云ふ特殊社會科學の嚴密なる概

念の規定である。

普通に社會學者は經濟學、法學、政治學、宗教學、倫理學、言語學、宗教學其他の學問の夫れ夫れの全體が、其の儘で特殊社會科學であるが如くに見做して居るが、併し嚴密に云へば其等の學問の夫れ夫れの全體が、決して其の儘で特殊社會科學であるのではなく、只其の一部門が特殊社會科學であるだけである。例へば經濟學は其の全體に於て一の特殊社會科學であるのではなく、只其の一部門が特殊社會科學であるだけであつて、其の外に哲學の一學科としての部分があれば、又實際學或は政策學の一學科としての部分もある。單に經濟學と云へば夫れは只經濟を對象とする學問を表示するだけの意味のものであつて、其の經濟と云ふ對象を如何なる方法で研究す可きものであるかを表示するものでない。かくて經濟の學問たる經濟學は、經濟を哲學的に考究する一の哲學的學科でも、亦之を科學的に研究する一の科學でも、亦之を實際學的或は政策學的に講究する一の實際學的或は政策學的學科でもあり得るのである。かくて科學としての社會學の一部門たる總合社會學が、經濟學の結果を總合すると云ふ場合に云ふ經濟學なるものは、決して其の科學としての部分も、亦其の哲學的一學科としての部分も、亦政策學的一學科としての部分も、總て包括する經濟學の全體を意味するものであつてはならないので、只一の科學としての經濟學の部分即ち一の特殊社會科學としての經濟學の部分だけを意味するものである可きである。然る

に從來の總合社會學の概念に於ては、又今日新たに唱へられて來た總合社會學の概念に於ても、經濟學及び其の他の社會的或は文化的學問の結果を總合すると云ふことは、一般に其等の學問の只特殊社會科學としての部分の結果を總合することを意味するだけでなく、其の全體の結果を總合することを意味するものの如く解されて居る。即ち管に其の科學としての部分の結果だけでなく、更に其の哲學的學科としての部分の結果をも、亦政策學的學科としての部分の結果をも、總て共に總合することを意味するものの如く解されて居る。かくて總合社會學は哲學的とならざるを得ないのみならず、更に又政策學的ともならざるを得ないのである。(但し社會哲學と社會政策學とは必然的に相聯結して居るので、何等かの社會哲學的思想を基礎としなければ、何れの社會政策學も存立することが出來ず、又何れの社會哲學も何等かの社會政策學に延長しなければ實際的には意義なきものとなる) そうしてさきに述べしメンツェルの見解、即ち一切の社會科學には何等かの主觀的或は世界觀的或は形而上學的思想が附着せざるを得ないので、又夫れがつまり社會科學を自然科學から區別する根本的特徴となつて居るので、隨ふて一切の社會科學の結果を總合すると云ふ社會學は、其の本質上哲學的或は形而上學的なものであらざるを得ないと云ふ見解は、事實上正當と認めざるを得なくなつて居るのである。

尙ほ右の點に就て此處に私が特に注意したい問題がある。それは近來我國に於ても盛んに主唱

する人々のある「社會科學の階級性」問題である。今所謂社會科學、正當には社會的學問と稱す可きものを、其の嚴密に社會科學と稱せらる可き部分の外に、哲學的學科としての部分も、亦政策學的學科としての部分も、總てを含む總體の意味に解するに於ては、所謂社會科學は全體としては階級性を帶びざるを得ない。是れ私の見る處によれば社會哲學及び其の必然的延長たる社會政策學は、經濟、法律、宗教其他何れの文化的方面に於ても、其の主觀的、世界觀的性質上實際的には自から階級的とならざるを得ないからである。されば社會科學の概念を其の嚴密に云ふ科學的方面に制限せず、其の哲學的方面も亦政策的方面も合せて見たる廣義に解するに於ては、夫れは當然階級性を帶びるものと考へるは正當である。併し社會科學の概念を其の嚴密に云ふ科學的方面に限定して考へるに於ては、何れの特殊社會科學も社會階級の差別とは全然無關係である可きである。即ち何れの社會階級に於ても承認されねばならぬ科學的智識の一體系を意味す可きものである。そうして其等の特殊社會科學の根本的要素的事實を究明すると云ふ純正社會學として云ふまでもなく、更に其等の特殊社會科學の結果を總合すると云ふ總合社會學としても、社會學はヤハリ社會階級の差別とは全然沒交渉である可きである。要するに私は何れの所謂社會科學も社會哲學の一方面或は其の全體としては、自から階級性を帶びざるを得ないが、併し嚴密なる意味の社會科學としては、特殊社會科學としても亦一般社會科學としても、全然無階級性のもの

である可きであつて、若し何人かの論述する何れかの特殊社會科學又は社會學が、少しでも階級性を帯びて居るならば、夫れは純粹なる特殊社會科學又は社會學ではなく、そうして其の階級性を帯びるだけは、つまり社會哲學の分子を混入して居るものであると云はねばならぬ。かくて嚴密に云ふ社會科學は、總て全く階級的差別に關係なき科學的眞理を、社會現象に就て究明す可きものであるのである。

却說以上述べ來れる處によりて明かに了解される如く、私は科學としての社會學の一部門たる總合社會學は、諸般の社會的或は文化的學問に就て、嚴密に社會科學と認められる方面、即ち嚴密に特殊社會科學として認められる方面の結果を總合するものにして、そうしてかゝるものとしては、哲學に支配されない、哲學から獨立する純科學として、存立し得るものと考へるのである。併し此處に重大なる一問題が起つてくる。夫れは總合社會學の純科學的概念は、右に述べしが如きものであるとして規定し得られるとしても、現實にかゝる總合社會學を建設することは、果して可能であるかと云ふ問題である。

(5) 純科學的總合社會學の可能性

私は總合社會學の純科學的概念を、前項に於て述べし如くに大體上規定せんとするのである

が、併しかゝる総合社會學は如何なる學問論に基いて學問論的に確立され得るであらうか。今日までに哲學者が唱へ出せる何れかの學問論に基いて、之を確立することが出来るであらうか。又は夫れが爲めには、新しき學問論を建設せねばならないのではあるまいか。先づ前者の問題から考察して見よう。併し最早詳しく論述する紙面はないから、此處では只一般の筋書だけを述べるに止める。

今科學とは總て方法論上自然科學と稱せられるもの、即ち普遍的概念及び普遍的法則（普遍的因果必然關係）を究明せんとするものにして、夫れ以外には科學は存立しないと見る傳來の見解、即ち方法一元主義と稱せられる見解に基いて、一の自然科學として総合社會學を建設することの不可能なるは、さきに述べし如くにトレールチがバールトの社會學論に加へた批判によりて明白であると思ふ。自然科學としての総合社會學は、トレールチの指摘せる如く、社會現象の特質によりて、實際に於ては自然科學的方法を大に狭め或は曲げて適用せねばならない。そうして夫れが爲めに、其の到達する普遍的法則なるものは、一般に普遍的法則と稱せられるものゝ如き、普遍性及び因果必然性を有しないのみならず、更に根本的には自然科學の方法の本來要求するが如く、因果的には確立されることが出来ないで、主として目的論的に確立されねばならぬものである。かくて自然科學としての総合社會學は到底成立し得ないと思はれる。

然らばリッケルトの學問論に従ふて、純科學的總合社會學を建設することが出来ないであらうか。リッケルトは科學は一般に現實態を理解し、因果的に究明することを認識目標となすものと認めるが、併し先づ其の普遍的理解及び普遍的因果の究明を目標とする自然科學と、其の個性的理解及び個性的因果の究明を目標とする歴史科學との二大部類に、科學を方法の上から區別し、次に對象の上から見て科學を自然を對象とする自然科學と、文化を對象とする文化科學との二大部類に區別し、更に右の二種の分額を組み合せて、自然を對象とする自然科學に就ては、方法上から見て自然科學的自然科學と歴史科學的自然科學とを區別し、又文化科學に就ては、方法上から見て自然科學的文化科學と歴史科學的文化科學とを區別して居る。そうしてリッケルトは、自然科學的文化科學の一として、社會學の成立し得ることを認めて居るが、併し夫れは如何なる學問論的構造を有するものであるかは全く論述して居ない。更に文化の本質上から見て、自然科學的文化科學としての社會學は、別段に重要な意義を有しないものゝ如く考へて居ると推察される。何れにしても、リッケルトの社會學概念は甚だ曖昧なものにして、そうして自然科學的文化科學としての社會學は、實際に於ては結局バールト社會學の如きものに歸着すると思はれる。彼の門下の著名なる哲學者メーリスの如きは、傳來の總合社會學は文化哲學の終結的學科としての歴史哲學として、即ち一の哲學的學科として始めて正當に成立し得るものゝ如く論じて居る。ト

ルールチはさきに述べし如く、リッケルトの學問論に基いて社會學の本質及び方法を論究し、傳來の總合社會學を排斥して、普遍的概念的態度をとする一の個別科學或は特殊科學として、社會學の概念を規定せんとするので、そうして其の傳來の總合社會學を排斥する點に就ては、私は根本的には彼の説を承認するのであるが、併し彼の社會學概念はリッケルトの見解をジムメルの舊見解に従ふて精練し、社會學を大體上形式社會學と同一視せんとするものであるから、私はさきにジムメルの舊社會學概念に加へたと同一の批評を之れに加へざるを得ない。要するにトルールチは傳來の總合社會學を排斥すると同時に、一切の總合社會學概念を排斥し、そうして社會學を根本的に形式社會學と同一視せんとするので、私の見解に従へば彼の社會學概念は甚だ不完全なものである。

次にデイルタイの學問論に就て考察するに、彼は學問を自然科學と精神科學とに大別し、自然科學は自然を對象として之を説明せんとするものにして、精神科學は生命の客觀化或は人間的社會的歴史的現實態或は精神生活を對象として、之を了解せんとするもの、詳しく云へば自己の體驗から之を了解せんとするものであると見る。そうして彼は始めはコント、スベンサー、シエフレ、リリエンフェルト等の社會學は、つまり粗野な自然主義的形而上學に外ならぬものとして排斥することによりて、社會學を全然排斥して居たのであるが、後ジムメルの形式社會學論が現は

れて學界の注意を惹くに至つて、彼は社會學に對する態度を變じて來た。要するに彼は傳來の總合社會學の意味に於ては、社會學は一の形而上學であるとして、其の一の科學としての存立を飽くまで否認するのであるが、ジムメルの主張するが如き形式社會學の意味に於ては、夫れは一の學科として存立し得るものと認めた。尙ほ彼は社會の外部的體制を、精神科學に於ける一の特殊な範域として認めたことによりて、ジムメルに先だちて形式社會學の概念を豫見して居たものゝ如くにさへ論じて居る。

彼は「精神科學序論」(Einführung in die Geisteswissenschaften, 1883)に於て社會的歴史的現實態之を對象とする精神科學を國家學と稱し、後者を對象とするものを文化諸體系學と稱して居る。

併し彼は形式社會學を組織的に論述して居ないから、一の

精神科學としての彼の社會學概念を詳しく學ぶことが出來ないが、とにかく自己の體驗から生命の客觀化を了解することを認識目標となすものと云ふ彼の精神科學の概念は、今日の學問論上重大なる意義を有するものと思はれる。私も理解科學に對立させて了解科學なるものを樹立せんとするに就て、彼の了解法からヒントを得る處さなくない。併し詳しく吟味して見ると、彼の了解の概念はまだ粗雑であつて、深大なる精練を加へることが肝要である。かくて彼の門下の哲學者で今日最も著名なる一人シュブランガーの如きは、リッケルトやフッサールの説を參考して、了解の理論を大に發展させて居る。併し私の見る處によると、シュブランガーの如くに了解の本質を究明して行くと、了解法は最早一の科學的方法ではなくして一の哲學的方法となつて仕舞ふ

と思はれる。此處で詳しくシュブランガーの説を批判する暇はないが、とにかく私はディルタイやシュランガーの精神科學の概念に基いて純科學的な総合社會學を建設することは、到底不可能であると考えざるを得ない。

次にマックス・ウェバーの了解社會學論に就て考察するに、彼は大體上リッケルトの科學論の原理を承認しながら、諸家の了解の理論を參照して之を修正し、了解社會學なるものを提唱したが、併し詳しく吟味して見ると、彼の了解社會學なるものは、つまり一の方法としての社會學に外ならぬものにして、一の科學としての社會學ではないことが覺られる。彼は彼が宗教社會學とか、經濟社會學とか、法律社會學とか稱するものに就ては詳しく論述して居るが、併し一の科學としての社會學其物に就ては全く論述して居ない。要するに彼が了解社會學と稱するものは、私の社會學概念から見ると、精々の處で純正社會學の一部分を含める組織社會學或は社會科學一般方法論を論究するに止まれるものである。併し彼は質料的或は實質的社會學として、普遍史即ち傳來の意味での総合社會學を建設せんとする意圖を有して居たことは、彼の著作を通じて窺知される。尙ほ所謂マックス・ウェバー團と稱せられる今日の獨逸の社會科學者中にあつて、マックス・ウェバーは社會學の方法論を創説したが、併し社會學其物を建設しなかつたと見て、彼の事業を補充し完成するが爲めに社會學其物を建設せんとする人々が、實際に企だてゝ居る社會學なるものは、普遍史 (Ledeler) 或は歴史哲學 (Alfred Weber) であるのである。かくてマックス・ウェ

バーの社會學なるものも一の獨立なる學問としては、結局傳來の總合社會學と同じ意味での一の哲學的學科に歸着するものにして、科學としての社會學ではないと思ふ。但し私はマックス・ウェバーの了解社會學の概念から重要な示教を受けたのであるが、併し彼の如く了解科學の本質は、先づ了解して、夫れより更に因果的に説明することであると見るは正當でないと思ふ。是れ私は了解と理解即ち因果的説明とは、幾多の同じ研究手段を使用するに拘はらず、其の認識の性質及び目標を異にするものであると考へるからである。尙ほマックス・ウェバーの了解の概念はあまりに偏狹にして粗雑であつて、夫れは嚴密に理解から區別されて、更に一層深められ、精練されることが必要である。

終りに現象學的方法に基いて社會學を建設せんとする、輓近の傾向に就て考察するが、先づ該方法に基いて社會の本體學を建設せんと企だて、例へばワルターの企だての如きは、明かに一の社會形而上學を建設せんとするものにして、一の科學として社會學を建設せんとするものでないことは明白である。併しジューメル形式社會學の概念を承け、更に質料的或は實質的社會學の概念を立て、之を補ない、そうして現象學的方法によつて Wissenschaft として社會學全體を基礎附けんとするクラカウエルの社會學論にありても、其の Wissenschaft と云ふは哲學を意味するものにして、科學を意味するものでない。かくてクラカウエルの Wissenschaft としての社會學と云ふも、つまり一の哲學的學科を意味するものに外ならぬ、尙ほさきにも述べしマックス・シェラーの文化社會學なるものも、ヤハリ現象學的に建設される一の社會哲學に外ならぬものである。要

するに今日現象學的方法によりて建設せんと企てられて居る獨逸の新社會學なるものは、科學としての社會學ではなく、一種の社會哲學に外ならないのである。そうして私は事實學から區別され、且つ其の基礎となる本質學としては、社會學は當然社會哲學である可きものにして、一の社會科學ではないと考へる。されば現象學的方法によるも、純科學的な總合社會學を建設することは不可能である。

現今の主要なる學問論と社會學との關係に就て以上述べし事は、あまりに簡單に述べんとせるが爲めに、粗雑に流れて居るかも知れないが、とにかく私は大體上右に述べしが如くに考へるのであるから、現今の何れの主要なる學問論によりても、純科學的な總合社會學を建設することは不可能であると思ふ。かくて純科學的な總合社會學を學問論的に正當に基礎附ける爲めには、尙ほ又純正社會學をも、つまり社會學全體を、更に社會科學全體を學問論に正當に基礎附ける爲めには、今日方法論上自然科學と稱せられるものや、歴史科學と稱せられるもの、即ち私が理解科學と稱せんとするもの、外に、更に私が了解科學と稱せんとするが如き、新しき科學部類を立てることが必要であるのである。要するに私は了解科學なる新しき科學部類が、學問論的に確立されることによつて、此處に始めて純科學的なものとしての新しき總合社會學が可能となり、更に社會學全體、否な社會科學全體が、正當に科學として確立されると考へるのである。併し本論文「一般社會學の概念」は既にあまりに長くなれる爲め一先づ是で終り、私の了解社會學の概念は別な論文として改めて論述したいと思ふ。